

ダニエル・デフォー

『ペストの記憶』（17）

訳 武田将明
Takeda Masaaki

確かに、ある地域の看護人について、自分が介抱する瀕死の患者の顔に濡れた布を被せることで、息を引き取ろうとしている人の命に勝手にとどめを刺したとのうわさを聞いたことがある。別の看護人は、彼女の世話する若い女性を窒息させたが、発作で気を失っているあいだの犯行で、やがて意識は回復するはずだったという。患者にこれを飲ませて殺したとか、いやあれを飲ませたとか、さらにはなんにも与えず飢え死にさせたという話もあった。でもこういううわさ話にはいつも二つの疑問点がついてまわっていたから、ぼくは一度も本気にしなかった。ただの作り話なのに、みんないつまでも話題にして互いに怖がってるだけだと思っていた。疑問点その一。このうわさが流れる場所がどこだろうと、決まって事件の場所は街の一番向こう側、つまりうわさの流れた地域から見て反対側や一番遠いところだったのが、まずあやしかった。東のホワイトチャペルでうわさが立てば、セント・ジャイルズ教区かウエス

トミンスター、ハウボンなど、ロンドンの西側で起きたことになった。しかしそっち側でうわさが立つと、今度はホワイトチャペルやミノリーズ、あるいはクリップルゲート教区の近所など東側の出来事とされたんだ。市街地でうわさが立てばどうかというと、そう、テムズ川を隔てた南側のサザークで起きたことになった。そのサザークでうわさが立てば、市街地で起きたことになる。こんな調子だった。

第二の疑問点は、たとえどこでうわさを聞いたとしても、話の細部がいつもおなじだったことだ。なかでもよくあったのが、濡れた布切れを二重にして瀕死の男の顔に被せる点とか、若く身分ある女性を窒息死させる点だった。こういうわけで、少なくともぼくの判断では、この手の事柄に真より嘘が多いのは明らかだった。

けれども、このうわさが人びとにいくらか影響を与えたのは否定できない。とりわけ、前にも話したけれど、誰を家のなかに入れて、誰に自分の命を委ねるか、みんながもっと注意深くなった。可能ならば必ず推薦を受けた人を雇った。そんな人を見つけられない場合は（その数はあまり多くなかった）、教区の役人に紹介を頼んだ。

しかしここもやはり、時代の災いは貧乏人をめがけて降りかかったんだ。この人たちは感染しても、食べ物も薬もなかった。治してくれる医者も薬屋もなく、世話してくれる看護人もいなかった。その多くが助けを求めて、いや食べ物さえも求めて窓辺に立ち、ひどく惨めで痛ましい調子で呼びかけていたが、そのまま死んでしまった。ただし付け加えないといけない。こういう人や家族の問題が市街地の首長どのに訴えられれば、必ず救済されたんだ。

本当のところ、あまり貧乏ではない人たちの住む家でも、なかには妻や子供を他所に疎開させ、さらに奉公人のいた場合にはすでに解雇しているところもあった。まったく本当の話、出費を抑えようとして多くの人たちがこのように家に閉じこもり、助けのないまま孤独に死んだのだった。

近所に住むぼくの知り合いが、市街地の壁より北のホワイトクロス街のあたりに住む商店主に多少お金を貸していたので、年のころは十八くらいの若い見習いを使いに出し、どうにかお金を取ってくるよう命じた。若者は家のドアの前に来たが、鍵がかかっているのに気づいて、かなり強くノックした。するとなかから誰か答えるのが聞こえたようだったが、確かではなかった。そのまま待つて、しばらく経つとふたたびノックをし、それから三度目のノックもすると、誰かがこちらに降りてくる音が聞こえた。

やっと家の主人がドアに現れた。膝までのズボンというより下着と、黄色いフランネルの胴衣を肌に着けていた。靴下はなく、スリッパを履き、白い縁なし帽を被っていた。そしてこの若者が言うには、顔には死相があった。

ドアを開けると、主人の男は言った。「こんなに俺の邪魔をしていったいなんの用だ？」若い見習いはいささかびっくりしたが、こう答えた。「〇〇の使いで参りました。主人からはお金を受け取るよう言いつかっています。あなたはご存知のことですが。」「そいつはご苦労さん」と生ける亡霊は言葉を返した。「クリップルゲート教会のそばを通ったらなかに入り、鐘を鳴らすよう頼んでくれ。」これだけ言うとふたたびドアを閉ざし、二階に上がって死んだ。おなじ日のことだった。いや、一時間も経たなかったかもしれない。これはその若い見習いが

直接ぼくに話してくれたことで、信じるだけの根拠がある。このころ、まだペストの流行は絶頂を極めていなかった。たしか六月だったと思う。この月の終わりに近い時期で、死の車があちこち走りまわる前のこと、つまり死者を悼んで教会の鐘を鳴らす習慣があったころの話だ。この習慣は、少なくともこの教区では、間違いなく七月の前に捨てられていた。というのも七月も二十五日になると、一週間の死者が五五〇人を超えるようになり、すると丁重に葬ることなどもはや不可能になったのだ。金持ちも貧乏人も隔てなく。

前に話しておいたように、こんなひどい災厄にもかかわらず、外には数多くの泥棒がいて、カモを見つけたら手当たり次第に盗んでいた。そして盗人はたいてい女だった。ある日の午前十一時ごろ、ぼくはコールマン街の教区にある兄の家まで出かけていた。よくやっていたように、異常がないか確認しに行ったんだ。

兄の家の前には小さな庭があり、それを門のあるレンガの壁が囲んでいた。壁のなかにはいくつもの倉庫があり、いろいろな商品が積まれていた。この倉庫のひとつには、女性用の山の高い帽子がいくつもの箱に収められていた。地方から送られたもので、おそらく輸出用だった。どこに輸出するかは知らないけれど。

スワン小路と呼ばれる場所にある、兄の家のドアに近づいたとき、ぼくはびっくりした。頭に山高の帽子を被った三、四人の女性に出くわしたのだ。あとで思い返すと、ひとり（もっといたかもしれないが）おなじような帽子を手にくっつけて抱えていた。けれども、この女たちが兄の家から出るのを見たわけではないし、さらに兄が倉庫にそのような商品を保管している

とはまったくしらなかったもので、わざわざ話しかけはしなかった。むしろ道の端に寄って女たちとすれ違うのを避けた。ペストが怖いので、当時そうするのは当たり前だった。ところがさらに門に近づくと、もっとたくさん帽子を抱えた別の女性が門から出てくるのに出くわした。「奥さん、あちらになんの用があったんですか？」と訊ねると、「あっちにはもっとたくさんの方がいるわよ。わたしはあの人たちとおなじことをしただけですから」と答えた。そこで急いで門に向かい、この女にはなにも言わなかった。その隙に女は立ち去った。でもちょうど門にたどり着くと、さらに二人が庭を横切ってこちらに来るのが見えた。やはり帽子を頭に被り、さらに小脇に抱えて外に出ようとしている。これを見たぼくは門に突入し、後ろ手にバタンと閉めた。バネ仕掛けの錠がついていたので、門はそのまま閉まった。女たちの方を向いたぼくは、「まったくもって、なにをしてるんだ？」と言い、帽子をつかんで取り上げた。その一人は、これが盗みを働くようには見えない人だったのだけど、「本当に申し訳ありません」と言った。「でも持ち主のない品物と伺ったものですから。これはお返し致しますわ。ですからあちらを見てください。わたしたちみたいな客がもっといるんですよ。」女は哀れげな様子で泣いていた。ぼくは帽子を受け取り、門を開けて二人に出て行きなさいと命じた。この女たちは本当に可哀そうな気がしたからだった。ところが、さっき言われたとおり倉庫の方を見ると、そっちにはさらに六、七人、女性ばかりがせっせと帽子を試着していた。辺りを気にせず黙々とふける様子は、帽子屋に自分の金で買い物にきた客さながらだ。

これには驚いてしまった。こんな大勢の泥棒を目撃したこと

だけじゃなく、自分の置かれた状況にも驚愕していた。いまぼくは、こんな多くの人びとのなかに割りこんでいるけれど、ここ数週間はずっと人目につかないよう努めていて、通りで誰かを見かければ道を横切って離れるようにしていたんだから。

驚いたのは向こうもおなじだったが、理由は違っていた。女たちは口々に訴えた。自分たちは近所の者で、この帽子は誰でも持ち帰って構わないと聞いているが、それはこれが誰のものでもないからだ、などなど。まずぼくは大げさな言葉で女たちを威嚇し、門に戻って鍵をかけてきた。これで全員の身柄を拘束できた。ぼくは女たちを脅して、「倉庫に外から施錠してみなさんを閉じこめ、市庁から役人を連れてきて引き渡します」と言った。

女たちは必死で赦しを求め、自分が来たときには門も開いていたし、倉庫の入口も開いていたと主張した。「きっと誰かが、もっと高価なものが見つかるかと踏んで、入口をこじ開けていたに違いありません」と言うのだ。確かにこれを信じるだけの理由があった。入口の錠前は壊され、外側に下げられていた南京錠も緩んでいた。それに大量の帽子が盗み出されたわけではなかった。

しばらくして、ついにぼくはこう考えた。いまは厳格な態度を示すときじゃない。第一そんなことをすれば、あちこち歩いて、多くの人に来てもらったり、会いに行ったりしないといけなくなる。その人びとが健康かどうかなんて、分かったもんじゃない。しかもこの時期すでにペストは猛威をふるい、週に四千人も死んでいた。ということは、いま怒りに任せて行動し、兄の商品に関して裁きを求めるだけでも、自分の命を失うかもしれなかった。だからぼくは、女たちの名前と数名の住所

を書き留めるだけで勘弁した。すると本当に近所の住人だと判明した。「兄がこの家に戻ったら、みなさん呼んで釈明を求めます」とさらに脅しておいた。

次にぼくは別の立場から女性たちに説教した。「いま、街じゅうが災難に見舞われているときに、よくもこんなことができますね。言ってみれば、目の前で神がとても恐ろしい裁きを下して、あなたたちの家のドアにもペストが迫っているというのに。いや、もう家に侵入しているかもしれませんよ。あと数時間もすれば、死の車がドアの前に停まって、あなたたちを墓場に運んで行かないとも限らないのです。」

これだけ説いてみても、ぼくの話が女性たちに深い印象を与えたようには感じられなかった。しかしそこへ近所に住む二人の男が、騒ぎを聞きつけてやってきた。彼らは兄の知り合いでもあった。というか、二人ともかつて兄の家で働いていたので、ぼくを助けに駆けつけてくれたのだ。いま言ったように彼らはご近所だったので、女たちのうち三人のことはすぐに分かり、その名前と住所を教えてくれた。どうやらさっき女たちの語ったことは正しいようだった。

(東京大学准教授)